出会いは世界を広げていく

交流会を通して

第12回

土肥いつき DOHI ITSUKI
京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

社研で出会った生徒たち

２月号に書いたように、わたしがはじめて担任になった年、入学式当日に新入生の在日コリアン生徒５人を同和部室に集めました。実は、これはわたしの勤務校でははじめての試みで、同和部の教員２人の間でも意見がわかれていました。それでも３人で話しあった結果､「やってみよう」ということになりました。当日、集まりの最後に、「今日集められてどうだった？」とたずねました。すると、みんな固い顔をしながら「集められてイヤだった」､「特別扱いしないでほしい」と、口々に言いました。ところが、最後のひとりが「わたしひとりでなくてよかった」と言いました。このひとことを聞いて、社会科学研究部（以下、社研）に在日コリアン生徒を集めようと思いました。そして、紆余曲折はあったものの、５人のうちの３人が入部してくれました。はじめのうちはハングルの勉強会をしていましたが、そのうち単なるダベリの会になりました。

ある時、Ｒさんという部員が「今日、こんなことがあった」と話してくれたことがありました。その前日、バレーボールの国際試合で日本と韓国が対戦し、韓国が勝ちました。翌日の教室でＲさんは「昨日、日本、惜しかったなぁ。なぁ、Ｒ」と友だちから言われたとのことでした。そしてＲさんは、「わたしな、『え？う、うん』と答えてん」と笑いながら続けました。

こんな会話もありました。「トックって知ってるやんなぁ？」､「うん、知ってる。お正月に食べる」､「そやけどな、中学の時に、まわりの友だちに『トック知ってる？』って聞いたら知らなかったんで、『スープにお餅を入れたもんやねん』って説明してん。そしたら『それ、トックって言わへんで、お雑煮って言うで』って言われてん」､「へー」。この生徒は、「トックではなくお雑煮」､「クッパではなく雑炊」とまわりの子らから教えられる中で、少しずつ自分の家のことをまわりに話さなくなっていったということでした。

こんな話を聞いた他の生徒は、ただ話を聞いていただけでした。きっと話をした生徒もなにかを望んでいたわけでなく、単に「あったこと」を話したかったんだろうと思います。

社研の活動をはじめる前年、Ａさんという在日コリアン生徒が「Ａ、焼肉、キムチ」という落書きをされ、このことをとりあげた学年集会を持ったことがありました。Ａさんにとって、落書きされたのは２度目でした。２度目はわたしたちに言ってくれたおかげでとりくみができましたが、１度目の時は、Ａさんはわたしの勤務校を退学したお兄さんに相談したとのことでした。お兄さんの答えは「学校に言っても、なんにもしてくれへん」だったとＡさんは教えてくれました。

社研での会話を聞きながら、Ａさんのことを思い出しました。そして、「もしも社研がなければ、みんなはこの思いをどこで誰に話したんだろう」と思いました。もしかしたら家族にだけ話したかもしれません。あるいは、家族にすら話さずに、自分ひとりで、そのモヤモヤを抱えていたかもしれません。そう考えた時、社研という場には、これまで考えていたような、単に「自分以外にも在日コリアン生徒がいる」ことを知る以上の意味があるということを実感しました。

この数年後、中国人生徒２人が入部してくれました。ある日、部室で２人が中国語で楽しそうに話をしているのをわたしは聞いていました。２人が笑ったので、わたしも笑いました。「せんせい、わかってるの？」「ぜんぜんわからへん」､「(笑)」。こんな小さな会話でしたが、ふだんこの２人が日本人に囲まれてどんな思いで生活しているのだろうと思わされました。と同時に、２人が中国語で会話できる場所が校内にあることがいかに大切であるかということも感じました。

社研では、日本人はわたし１人でした。そこで感じるなんとも言えないアウェイ感は、そのまま社研の生徒が日々感じていることなんだろうなと思いました。この感覚を味わえたことは、わたしにとって大きな学びでした。この社研での経験が、のちの京都在日外国人生徒交流会、そしてトランスジェンダー生徒交流会の原点だろうと思います。次号には、このふたつの交流会のことを書こうと思います。